

# 国語学用語‘形態’，‘形態素’，‘形態論’の問題

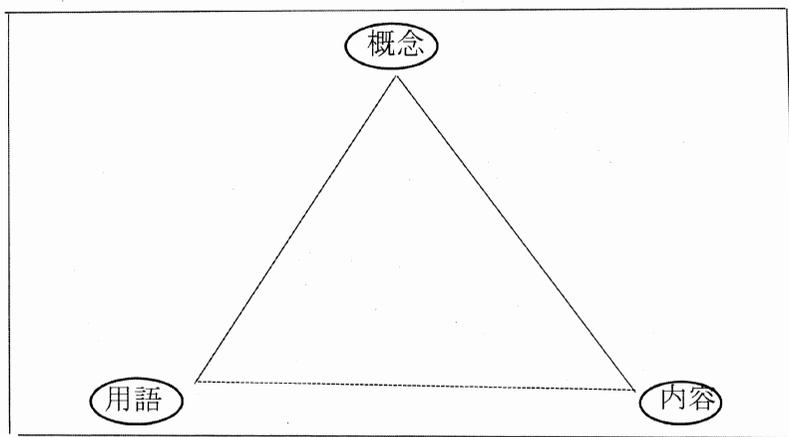
裴株彩 Bae Juchae ペ・ジュチェ(カトリック大学)

## 1. 序論

学問において概念(concept)は、学問的内容を圧縮し項目として作ったものである。概念は考え(すなわち思考)の領域に存在するので、学問的意思疎通のためにはそれを言語化しなければならない。概念を言語によって表現した語句が用語(term)である。専門分野において使用するという含蓄を強く表そうとするときは、用語を専門語(technical term)と呼ぶ。学問的内容、概念、用語は、それぞれ意味三角形の3つの頂点である、指示物、概念、単語に該当する。これを[図1]で表現することができる。

学問が発展すれば、用語と概念が拡充され整備される。逆に、用語と概念を拡充し整備することが、学問の発展に寄与する。国語学の使用と概念も国語学の実展と共に発展してきた。しかし、詳しく調べてみると、全ての用語と概念が、生まれて育ち成熟するときまで、順調な道を歩んだわけではない。研究者たちは、国語学の実展を積み上げていくのに、障害になる用語と概念を整頓するために、絶え間なく努力し、その過程において用語と概念の運命は、栄枯盛衰を繰り返す食い違ひのが常である。

[図1] 意味三角形の観点から見た概念と用語



用語と概念がいったん定着すれば、問題があったとしても変更するのがたやすくはない。すでに定着したものの中で、明瞭でない概念、学問的内容をうまく範疇化できない概念、概念を正確に表現できない用語、非体系的な用語などは、学問の発展を阻害しうる。問題の三角形を考慮して変更すべきものは変更し、捨てるべきものは捨てなくてはならない。

国語学の用語‘形態’，‘形態素’，‘形態論’と、この3つが表す概念は、ずっと前に定着し、今となっては国語学の発展に助けになるだけであり、障害になりはしないように思われる。しかし事実はそうでない。これらが持っている問題点を検討し、代案を模索することが、本稿の目的である。

## 2. ‘形態’の問題

国語学の用語‘形態’が表す代表的な概念は、以下の2種類である。

形態(morph): 形態素の音韻的実現形。＝形態素の発音。

形態(form): 意味を持った言語単位の実現形。＝形態素，単語，句，文章，談話の実現形。

この2つの‘形態’を区別するために形態(morph)を‘形態1’，形態(form)を‘形態2’と呼ぶことにする。

### 2.1. 形態1

形態1は、形態素と関連して欠くことのできないものとして論じられてきた。名詞‘맛’を例にとれば、形態素と形態1の用いられかたを以下のように把握することができる。

形態素: {맛}

形態1: /맛/, /만/, /만/

この3つの形態1/맛/, /만/, /만/が同じ形態素に属するということを強調するとき、これら各々を‘異形態(allomorph)’と呼ぶ。そして1つの形態素が2つ以上の異形態で実現する現象を交替(alternation)と言う。

形態1を‘形態素の発音’であると定義するとき、‘発音’は音素的表象(phonemic representation)、すなわち音素層位に存在する発音を指し示す。形態素交替の理論

的枠組みを定めたアメリカの構造言語学において、形態 1 は発音であって、表記であるはずはない。文語ではない口語だけを言語学的分析の対象とみたからである。ところが、国語学界においては形態 1 を表記でありうるものと見る見解がこれまで続いてきた。特に学校文法においては、形態 1 を発音ではない表記の観点から理解する傾向が強い。例えば、‘붓다’を‘ㄸ不規則用言’と命名したことは、‘붓다 [분따], 붓고 [분꼬], 붓지 [분찌]’などにおける表記‘붓’を基準にして形態素{붓-}の形態 1 を把握した結果である。発音[분]を基準にして形態 1 を把握したとすれば、当然‘ㄸ不規則用言’と呼んだであろう。

## 2.2. 形態 2

形態 2 は、形態 1 よりもさらに広い範囲の多様な対象を指示する。形態 2 は意味を持ったすべての言語単位、すなわち形態素、単語、句、文章、談話の実現形を意味する。実際に、句の形態 2、文章の形態 2、談話の形態 2 を論じることが、まれではあるが充分に可能である。単語の形態 2 は語彙素(lexeme)との違いをはっきり表すために‘語形(word-form)’と呼ばれてきた。

形態 2 も、発音にもなりうるし表記にもなりうる。発音としての形態 2 と表記としての形態 2 を、各々簡単に‘発音形態’と‘表記形態’と呼ぶことができる。例えば、‘붓고’において、形態素{붓-}の発音形態は/분-/であり、表記形態は‘붓-’である。このように見れば、形態素の形態 2 の中で、発音形態は形態 1 と同じ対象を指し示すことになる。

単語の形態 2 と句の形態 2 の例を 1 つずつあげれば、以下の通りである。

単語の形態 2(=語形): 表記形態‘장미꽃’, 発音形態/장미꼐/

句の形態 2: 表記形態‘장미꽃 한 송이’, 発音形態/장미꼬탄송이/

単語～談話の形態 2 は、発音形態、表記形態ではない構造を意味する用法もある。すなわち、言語単位が単語～談話を形成する構造を表しもする。これを臨時に‘構造的形態’と呼ぶことにする。例えば、‘맑은 물이 흐른다.(きれいな水が流れる)’という文章の形態 2 は、以下の 3 種類を意味する。

表記形態: 맑은 물이 흐른다.

発音形態: /말근 무리 흐른다/

構造的形態: 【{맑-}+{-은} # {물}】+{이} # {흐르-}+{-는다}<sup>1)</sup>

よって、‘形態 2’の概念を以下のように整理することができる。

- (1) 形態素の形態 2
  - ① 形態素の発音形態
  - ② 形態素の表記形態
- (2) 単語～談話の形態 2
  - ① 単語～談話の発音形態
  - ② 単語～談話の表記形態
  - ③ 言語単位が単語～談話を形成する構造

### 2.3. 形態 1 と形態 2 の区別

形態 2 は意味と対立する．記号の形式(記標)と記号の内容(記意)\*の対立を考慮すれば、意味を持った言語単位の形式は形態 2 であり、その内容は意味である．このような形態 2 は、言語を記述するとき必須不可欠な概念である．そして、その概念を表す用語として‘形態(form)’を使用することが、一般言語学的観点からも適切であり国語学界の慣用を考慮するときもふさわしい．

\*【訳者注】ここで‘記標’，‘記意’とされているのは、それぞれ、ソシュールの術語である *signifiant*(記号表現，能記)，*signifié*(記号内容，所記)を指す．

問題は形態 1 と形態 2 が全く同じ‘形態’という形態を持っているので、研究者たちに不便と混乱を与えるところにある．英語の用語は、各々‘morph’と‘form’として明確に区別されるので、これは国語学界が解決すべき問題である．‘morph’も語源的に‘form’を意味するので、2 つは同じ単語に翻訳することになったのであろうが、結果的に用語体系が概念体系に効率的に反映しえなくなった．概念が異なれば用語も異なるのが理想的である．今からでも形態 1 と形態 2 を区別する用語を作らなければならないであろう．形態 2 を‘形態’としておき、形態 1 だけ異なった形態に変更するのが便利な方案であると判断する．‘形態 1’の代わりに新しい用語が速やかに作られることを期待する．

用語体系が概念体系を効率的に反映できない別の例として、‘단모음(たんぼいん)’をあげることができる．韓国語学界は、長い間‘단모음(単母音)’と‘단모음(短母音)’の同音衝突による不便を耐えている．似通った脈絡にしばしば現れる、互いに異なった概念を全く同じ形態‘단모음’によって指し示すことは不合理である．すぐに 2 のうちの 1 つを別の形態に変更して、混同を避けなくてはならない．‘단모음(単母音)’を‘단순모음(単純母音)’へと変えれば簡単である．そうすれば、漢字を併記する必要もなく、平素に区別しなかった第 1 音節の音長を今

更区別する必要もなく<sup>2)</sup>、このような区別に話者と聴者が努力を傾けて神経を使う必要が全くない。

### 3. ‘形態素’の問題

形態素(morpheme)は、‘意味を持った最小の言語単位’と定義される。形態素は記号学的観点から見ると、一種の言語記号である。言語記号としての形態素は、記意と記標の結合体である。記意は形態素の意味であり、記標は形態素の形態<sup>1)</sup>、すなわち発音形態である。

‘形態素’という単語は、‘形態+素’の構造を持っている。<sup>3)</sup> ‘形態素’という用語は、記意と記標の結合体である形態素を、形態の最小単位、すなわち記標の最小単位であるかのように表現したので、不適切である。これは、あたかも形態素が持った記意、すなわち意味だけを基準として、形態素を‘意味素’と呼ぶような不適切な命名である。

英語の‘morpheme’を直訳したものが‘形態素’であろう。‘morpheme’は記標中心の形態素分析が横行していたアメリカ構造主義の産物と見られる。すなわち、‘morpheme’から命名の誤謬が起源したものだと言えよう。

形態素は単語を分析して得られた単位である。故に、単語を成す最小の言語単位という意味で、‘単語素’と呼ぶのがよりよいであろう。‘単語素’を縮めて‘語素’と呼ぶこともできる。形態素を指し示す用語として、‘形態素’の代わりに‘語素’を用いることは、以前、김민수 Gim Minsu キム・ミンズ (1964), 고영근 Go Yeong'geun コ・ヨンゲン (1993)において提案された。

### 4. ‘形態論’の問題

#### 4.1. 形態論の概念

言語学の下位分野のうち、形態論ほどそのアイデンティティーについての論争と非難が甚だしいものはない。その根本原因は、各言語の形態論的類型がどうであるかによって、言語ごとに形態論的内容が非常に異なるところにある。

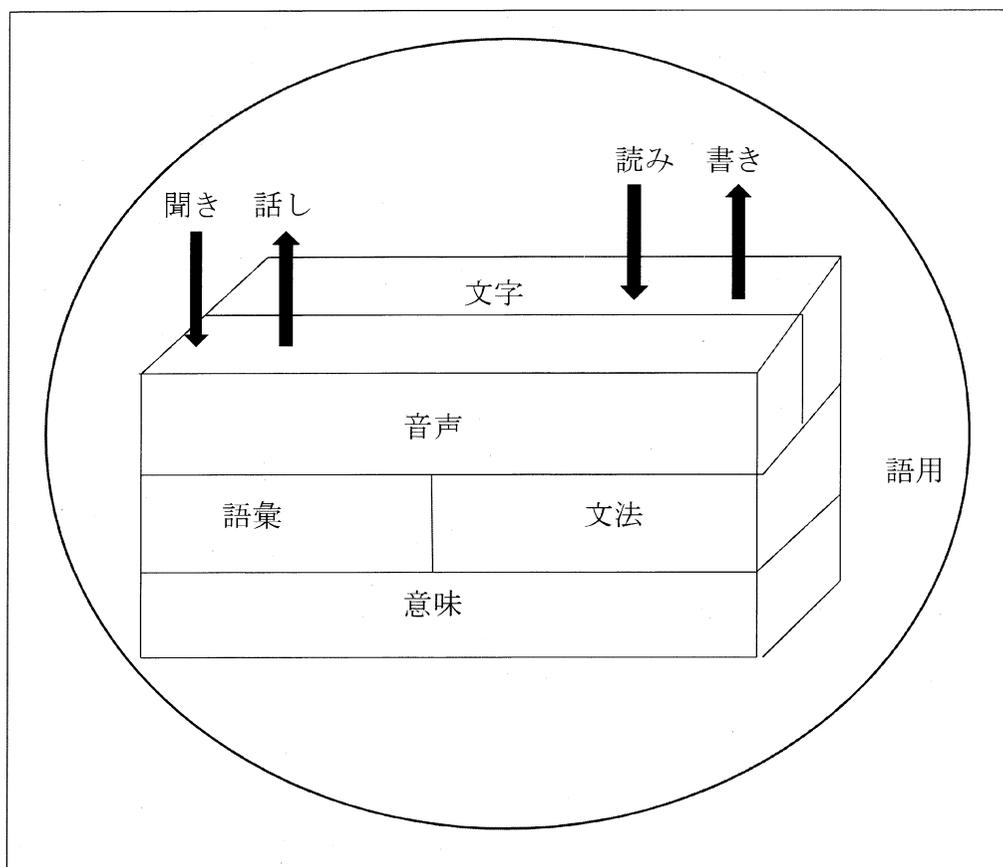
ヨーロッパの言語学者たちが‘形態論’という用語を初めて作るとき、考えた形態論の内容は屈折論であった。ヨーロッパの諸言語が大部分屈折語であるので、屈折語の屈折を基準として形態論の性格を規定したのは、当然なことであった。その後、形態論的類型が異なる諸言語にも、‘形態論’という用語と概念が適用

される過程において、形態論という学問のアイデンティティーに混乱が生じることになった。

形態論が取り扱う核心的な言語単位は単語である。近頃、‘形態論’を‘単語の内部構造についての学問’と定義するところにも、そのような事実が反映されている。ところで、単語を主に取り扱う学問として語彙論もある。語彙論と形態論の関係を明確にしなければ、言語学全体の体系をうまく把握することができない。考えを変えてみれば、言語学全体の体系を見渡す観点から形態論の位相を定立することが、正しい方法である。

[図 2]は、‘言語部門と言語機能の関係の模型’である(배주채 2017)。

[図 2] 言語部門と言語機能の関係の模型



この模型に登場する言語部門 6 つを研究する学問 6 つが、言語学の核心分野である。これらが微視言語学である。

音声部門：音韻論，(音声学)

文字部門：文字論

語彙部門：語彙論

文法部門：文法論

意味部門：意味論

語用部門：語用論

語彙部門の単位は語彙素(=単語)である。文章を作る材料としての単語はどの言語にも大量に存在する。そのような単語が集まっているところが語彙部門である。語彙部門を研究する語彙論の主題は大きく2種類である。

造語法：1つの単語がどのようにつくられるか

語彙体系：単語と単語は互いにどのような関係を結んでいるか

文章を作る基本材料は単語である。言語によって文章を作るとき、単語以外の言語要素(大抵自立性がない言語要素、すなわち依存要素)を動員することもあるが、単語を動員せずに文章を作る言語はありえない。単語だけ利用しようが、単語以外の言語要素も動員しようが、文章を作る方法は文法である。文章を作るとき単語と単語が持つ関係が統辞論の主要内容であるとすれば、依存要素が文章と持つ関係は、観点によって統辞論の対象と見もし、形態論の対象と見もする。

統辞論の内容が空いている言語はない。しかし、形態論の内容が空いている言語はありうる。形態論の内容がどれほど満ちていて空いているかは、その言語の形態論的類型にかかっている。言語によって形態論の内容が豊富でもあり、貧弱でもあるのである。

上の模型に‘形態部門’のようなものはない。言語普遍的に形態部門という言語部門が一定に存在するわけではないという意味である。簡単に言えば、ある言語の形態論的内容は、語彙部門と文法部門の境界においてどのようなことが起こるのかによって決定される。すなわち、文章を作るとき、単語の内部においてどのようなことが起こるのかによって決定される。屈折語の屈折は、文章を作るとき単語の内部において活発な作用が起こる。屈折語は形態論的内容が豊富である。屈折語のように形態論的内容が豊富な言語の場合には、語彙部門と文法部門の間に、形態部門が相当な分量ではっきりと存在するであろう。その反面、形態論的内容が貧弱な言語の場合には、形態部門の分量が少なく勢力が微弱であるだろう。

韓国語の形態論の主題を최형용 Choe Hyeong'young チウエ・ヒョンヨン(2016)をもとに要約すると、以下の3種類である。<sup>4)</sup>

品詞  
助詞と語尾  
造語法

造語法は上で述べたとおり語彙論の対象である。ある形態素が単語を作ることが文章を作ることと関連するとすれば、それは形態論や統辞論の問題であると言いうことができる。しかし、形態素によって語彙部門の単位、すなわち語彙素を作るとは、一般的に文章を作ることと関係がない。韓国語の造語法の大部分が、形態素から語彙素を作り、全体の単語の数が増える、すなわち語彙の大きさがもう少し大きくなる結果をもたらすのであって、単語をもってして文章を作るのには関与しない。故に、造語法は基本的に語彙論の対象である。<sup>5)</sup>

品詞は単語の文法的部類である。すなわち、各単語が文章の中においてどのような役割をすることができるのかによって分類したものが品詞である。単語を分類することは、その観点が文法であれどのようなものであれ、語彙論の作業である。音声の観点から、1音節語、2音節語、3音節語などに単語を分類することが、音韻論の作業ではなく、語彙論の作業であることと同じである。文法論においてはただ文章を作るとき、各品詞がどのような役割をするのかを取り扱うだけである。

助詞と語尾は、韓国語において文章を作る材料として使用する単語以外の要素、すなわち依存要素である。故に、助詞と語尾についての研究は文法論に属する。万一、体言、副詞などに助詞が付いた語節\*を単語であると規定すれば、助詞の用法を文法論、その中でも形態論において研究することができるであろう。また、用言に語尾が付いた語節を単語であると規定すれば、語尾の用法を形態論において研究することができる。そのように単語を規定すれば、‘単語’を、形態論的単語、統辞論的単語、語彙論的単語、はなはだしきに至っては、音韻論的単語などへとずたずたに引き裂く結果になる。‘単語’という1つの用語が、状況や観点によってこのような意味も持ち、あのような意味も持つことは、言語学の発展に妨げになる。誰でも自分が便利な時に持ってきて使うことができる軽い用語は、学問的価値がない。

\*【訳者注】文章を構成している各々の一区切り。文章成分の単位であり、分ち書きの単位になる。つまり、韓国語において分ち書きされたひとまとまりの単位であり、日本語の文節の概念に似る。

韓国語の語節を単語のように誤解してきたことは、屈折語中心の偏見から由来したことである。韓国語であれ、他の言語であれ、語彙素だけを単語として規定することが、普遍性を得ることができる態度である。要するに、助詞や語尾が付

いた語節を、決して単語であるとする事ができず、助詞と語尾についての研究を形態論として見る事ができない。助詞と語尾についての研究は、伝統的な用語で言えば、統辞論であり、本稿の用語としては文法論である。

韓国語において用言に語尾が付く現象を活用と呼び、屈折に属するものと見てきた。しかし、韓国語の活用が屈折語の屈折とは異なるので、異なるように取り扱われなくてはならないということは、박진호 Bag Jinho パク・チンホ(1999)において論議された。박진호(1999)の表現を借りれば、“韓国語において体言に助詞が付く、用言に語尾が付く現象は、単語自体の形の変化ではなく、単語、より正確に言えば単語以上の単位に、ある依存要素が結合する現象である。”屈折は語形の変化であるが、韓国語においてよく屈折のように取り扱われてきた曲用と活用は、決して語形の変化ではないのである。

例えば、以下のドイツ語の文章において、‘liebe’を、語幹‘lieb-’に語尾‘-e’が結合したものとして記述するように、韓国語の‘믿고’を、語幹‘믿-’に語尾‘-고’が結合したものとして記述すれば、2つの言語の動詞の活用が全く同じに見える。

#### ドイツ語

Ich liebe dich. (私はあなたを愛する。)

Du liebst mich. (あなたは私を愛する。)

#### 韓国語

나는 너를 믿고 있다. (私はあなたを信じている。)

나는 너를 믿었다. (私はあなたを信じた。)

ドイツ語において、‘liebe’と‘liebst’は、同一の語彙素の互いに異なった語形である。これら进行分析した語幹‘lieb-’と語尾‘-e’, ‘-st’が、韓国語の研究者には、あたかも各々形態素であるように見えるが、そうではない。‘liebe’と‘liebst’が丸ごと形態素である。語尾‘-e’, ‘-st’が各々何らかの文法的意味のようなものを持った単位であるとは到底認定することができない。

韓国語において、‘믿고’は動詞‘믿-’と語尾‘-고’に、‘믿었다’は動詞‘믿-’と語尾‘-었-’, ‘-다’に分析される。ドイツ語の語尾とは異なって、韓国語の語尾‘-고, -었-, -다’はすべて形態素である。正確にはすべて形態1である。形態1‘-고’は形態素{-고}の実現形であり、形態1‘-었-’は形態素{-었-}の実現形であり、形態1‘-다’は形態素{-는다}の実現形である。韓国語の動詞の活用を、ドイツ語の動詞の活用と全く同じに屈折であると言うことはできないのである。ドイツ語の屈折はドイツ語の形態論の主な対象である。韓国語にはそのような屈折がない。故に、韓国語の形態論には屈折がない。

韓国語の形態論において取り扱うに値する主題である、造語法、品詞、助詞と語尾は、すべて形態論の主題ではない。結局、韓国語の形態部門はほとんど空いている。<sup>6)</sup>

#### 4.2. 形態音韻論の所屬

最初の全面的で体系的で詳細な韓国語文法書である최현배 Choe Hyeonbae チウエ・ヒョンベ(1937)は、形態論を‘씨갈 ssi’gar シガル’という名前の下で記述した。씨갈の内容の中で、不規則活用は形態音韻論に属する主題である。形態素や単語が結合するとき起こる規則的な音韻現象は、‘소리갈 so’ri’gar ソリガル’、すなわち音韻論において叙述している。このように形態音韻論の主題の中で不規則活用を形態論に含ませることは、남기심 Nam Gisim ナム・ギシム・고영근(1985)にそのまま引き継がれた。

안병희 An Byeongheui アン・ビョンヒ(1959/1978)の題目は、‘十五世紀 國語의 活用語幹에 對한 形態論的 研究’(15世紀韓国語の活用語幹についての形態論的研究)である。その内容は、用言の活用についての形態音韻論的研究である。ここにおいて形態音韻論の位相についての1つの態度を見ることができる。안병희(1959/1978)の観点において形態音韻論は形態論だったのである。これはアメリカ構造主義の態度でもあった。<sup>7)</sup>

1960年代からは、国語学界において‘形態音素論’または‘形態音韻論’という用語がよく登場し始めた。허웅 Heo Ung ホ・ウン(1963)は、形態論の一番最初の場所で形態素の音韻論的交替を紹介し、これを研究する分野を“形態音韻(素)論(morpho-phonemics)”と言うとした。

一方、Lee Pyonggeun(1970)において京畿方言の曲用、活用、造語法に現れる形態素の音韻論的交替を取り扱いつつ、“morphophonological study”(形態音韻論的研究)、이익섭 Yi Igseob イ・イクソプ(1972)において江陵方言の曲用、活用、派生に現れる形態素の音韻論的交替を取り扱いつつ、“形態音韻論的考察”と称した。ところが、方言を記述したこの2つの研究においては、形態音韻論が音韻論の下位分野なのか、形態論の下位分野なのか、そうでなければ独立した分野なのかについて、はっきりした態度を見せはしなかった。

1970年代に生成音韻論を韓国語に本格的に適用するようになるにつれて、音韻論研究者たちの間に形態音韻論の主題が音韻論の所管であるという認識が一般化した。이병근 Yi Byeong’geun イ・ビョングン(1975)、최명옥 Choe Myeong’og チウエ・ミョンオク(1982)を始めとした多くの音韻論の論著がそのような認識を見せてくれる。

一方、1980年代以降の韓国語の文法論概論書においては、‘形態音韻論，形態音素論’という用語を導入しないまま，허용(1963)と同じく形態論において形態素の音韻論的交替を紹介することが一般化した. 이익섭・임홍빈 Im Hongbin イム・ホンビン (1983), 남기심・고영근(1985), 이익섭・채완 Choe Wan チウエ・ワン (1999), 고영근・구본관 Gu Bon'gwan ク・ボングワン(2008), 최형용(2016)などが代表的である.

韓国語の文法全般を取り扱う本として，形態素を説明しつつ形態音韻論的内容を全く紹介していない이익섭(2005)は例外的な場合である. 助詞を取り扱った이익섭(2005:115)の脚注に以下のような内容が出ている.

‘을’は子音で終わる名詞の次に，‘를’は母音で終わる名詞の次に用いられる. 今後‘을’を代表と見なす. 今後必要なたびごとに明らかにするが，他の但し書きがない限り，一貫して子音の次の形態を代表と見なして進める.

文法論の論著において長い間，助詞‘을/를’や，語尾‘-(으)면’，‘-아서/-어서/-여서/-서’などと異形態をいちいち羅列していきながら，その文法的用法を説明してきた. 助詞と語尾を文法的観点から取り扱うとき，その音韻論的交替に神経を使い続けることは，正しい文法記述の態度ではない. 助詞の形態が‘을’であれ‘를’であれ，その文法的用法は変わりが無いからである. 代表形を1つ定めて，助詞‘을’がどうであり，語尾‘-어서’がどうであるという具合に記述すれば，ずっと簡潔な記述が可能である. 上の이익섭(2005:115)の脚注は，このような認識を見せてくれる例であると言うことができる.

このような認識は，音韻論と文法論の層位が異なることをはっきりと認識するところから出発する. 배주채(1996:62-63/2011:68-69)において，以下のように形態素と基底形の違いを強調したことは，そのような認識に由来する.

形態素と基底形は明確に区別しなければならない. 形態素は文法的単位であり，基底形は音韻論的単位である. 基底形は形態素が持った音韻論的情報である. 形態素を音声と意味を持った最小の言語記号と定義するとき，形態素が持った音声というものがまさに基底形である. 語彙部(lexicon, 言語学的な意味の辞典)に形態素ごとに，音韻論的な情報が基底形という形態で入っていると言うことができる. 形態素が音韻論的単位ではないので，形態素を表記するとき{ }の中に記す代表形が，必ず基底形や基本形のような音韻論的形態である必要はない. 形態素が持った意味を利用し表記することもでき，他の任意の記号を使って表記することもできる. 例えば，{집}は意味を利用

し{家}と表記することもできる。また、韓国語の形態素目録に入っている 97 番目の形態素が ‘집’ であれば、{97}のように表記することも可能である。

文法論においては、どのような単語や形態素が出会って、どのような文法構造を形成し、どのような文法機能を発揮するかだけを取り扱えばよい。各形態素がどのように発音されどのように表記されるかは、神経を使う必要がない。形態音韻論的交替、すなわち形態素の音韻論的交替を文法の記述において論ずる必要がない。이익섭(2005)において助詞の表記について取った態度は、このような観点において非常に適切なものである。

形態音韻論が文法論に属するという文法論分野の一般的認識を批判し、音韻論に属すると主張したのが叫주채(1991)である。박진호(1999)は形態論の位相を点検する場所において、叫주채(1991)と同じ側に立った。この観点によって、韓国語の形態音韻論の様相を概略的に描いたのが、叫주채(1996/2011)の 4 章(形態音素)であり、全面的に描いたのが、叫주채(2003/2013)の第2編である。叫주채(2003/2013)は、韓国語の音声部門全般を詳細に記述したものであるが、純粋音韻論(音韻論において形態音韻論以外の分野)に該当する第1篇よりも、形態音韻論に該当する第2編の分量がはるかに多い。これは、韓国語音韻論において形態音韻論の比重が非常に大きいということを意味する。

英文法書において形態音韻論をどのように取り扱っているのかは、*Cobuild English Grammar*(1990)において窺うことができる。この本は、1章‘人と事物の指し示し(Referring to people and things)’から 10章‘情報の構造(The structure of information)’まで、多様な文法現象を体系的かつ簡明に叙述している。巻末に付録として載せた‘参考編(The Reference Section)’の目次は以下の通りである。

発音案内(Pronunciation guide)

可算名詞の複数形形成(Forming plurals of count nouns)

形容詞の比較級と最上級形形成(Forming comparative and superlative adjectives)

所有格形の表記と発音(The spelling and pronunciation of possessives)

数(Numbers)

動詞の語形と動詞句の形成(Verb forms and the formation of verb groups)

副詞の形成(Forming adverbs)

副詞の比較級と最上級形形成(Forming comparative and superlative adverbs)

この中で、発音案内、数、動詞句の形成、副詞の形成を除外した残りの項目は、すべて形態音韻論に関するものである。すなわち、名詞の場合複数形、所有格形

の表記と発音、動詞の場合現在形、過去形、過去分詞形の表記と発音、形容詞と副詞の場合比較級形と最上級形の表記と発音についての記述は形態音韻論である。このような英語の形態音韻論の内容が、1章～10章には全く出てこない。これは形態音韻論が文法論に属していないと見た結果である。

韓国語の文法書にも形態音韻論を含ませる理由が全くない。例えば、ある動詞が規則活用をするのか不規則活用をするのかということは、その動詞の文法的性格と全く関係がない。また、ある語尾が媒介母音を持つ語尾なのかそうでないのかは、その語尾の文法的性格と全く関係がない。韓国語の文法論は、長らくの迷妄から覚めなくてはならない。

### 4.3. ‘形態論’ と ‘形態音韻論’ の用語

§4.1.と§4.2.の論議によれば、韓国語において形態論はその存在がかすかであるばかりである。これとは別途に、‘形態論’ という用語も形態論の本質をうまく捉えることができない用語である。2章と3章において見たように、‘形態’ と ‘形態素’ という用語がすべて不適切であるので、これらに根拠を置いた ‘形態論’ という用語も同じく不適切である。形態論は形態や形態素を取り扱う学問ではない。形態論は単語を文法の観点から取り扱う学問である。‘形態論’ よりは ‘単語文法論’ または ‘語法論’ のような用語が、より適切でありうる。未だ結論を下すことができない。

§4.2.の論議によれば、形態音韻論は音韻論の下位分野である。ところが、‘形態音韻論’ という用語において、‘形態’ は ‘形態、形態素、形態論’ などの用語に依拠している。‘形態、形態素、形態論’ という用語がすべて不適切であるならば、‘形態音韻論’ という用語もまた不適切である。これもまたいまだ代案を示すことができない。

## 5. 結語

ヨーロッパの言語学から入ってきた ‘形態、形態素、形態論’ のような用語とその概念は、一般言語学的にも問題を抱えているが、韓国語を研究し記述する場においては、より一層問題が大きい。ここで核心になっている単語 ‘形態’ が、形や格好を意味する基本的な用法を持っている限り、‘形態、形態素、形態論’ は正確な概念規定に障害になり続けるであろう。

本稿において問題とした用語 ‘形態、形態素、形態論、形態音韻論’ を置き換える適切な用語を探すことができないだろうが、そのような努力は続けられなければ

ばならないだろう。特に形態論の概念をどのように設定するのかという問題は、韓国語をどのように体系的に記述するのかという問題を解く鍵になるので、非常に重要である。本稿においては、既存の韓国語文法論において前提としてきた韓国語形態論の諸主題を、大部分語彙論や統辞論や音韻論の所管であると判定した。韓国語の形態論研究者たちは、家の中の物をすっかり盗まれる荒唐無稽な感じを受けうるかもしれない。しかし、学問的研究主題は誰の所有物でもない。誰でも適切な理論的枠組みを持って真実をよく明らかにすれば、よい研究だと言うことができる。

‘形態、形態素、形態論’の用語と概念に問題があることが分かっているながらも、取り掛かることができないのは、恐らくはこれらがあまりにも大きい理論的な問題が絡んでいるからであろう。だからと言って、ただほったらかすことはできない問題であると考える。

#### 【原注】

- 1) この構造的形態の表示にどのような情報を含ませなければならないかについては、多様な見解が可能である。本文のものは臨時的である。
- 2) 標準発音において‘단모음(単母音)’の第1音節の母音は短く、‘단모음(短母音)’の第1音節の母音は長い。
- 3) 『標準国語大辞典』には、最小単位を意味するこの‘素’が単語としても接辞としても載っていない。『高麗大韓国語大辞典』では、‘形態素’の構造を[+形態-素]と表示し、‘-素’を接尾辞と見た。そして、接尾素‘-소 21(素)’を表題語として収録した。その解説は以下の通りである。

-소 21[素][接尾] 一部の名詞の後ろに付き、そのような性質を持った成分や要素であるという意味を付け加え、名詞を作る言葉。[発酵素 / 繊維素 / 葉緑素 / 栄養素 / 凝集素 / 血液素 / 活力素。]

- 4) 최형용(2016)は、助詞、語尾を品詞として認定し、品詞論において取り扱っているが、本稿においては、品詞を単語の文法的部類と定義する観点によって、助詞と語尾を依存要素と見て、品詞と分離し提示する。
- 5) 動詞‘먹-’に接尾辞‘-이-’を付けて使役動詞‘먹이-’を作ること、接尾辞‘-히-’を付けて受動動詞‘먹히-’を作るとは、単語‘먹-’が文章を作ることに関与すると見ることもできる。‘먹이-’を叙述語とした使役文や‘먹히-’を叙述語とした受動文の文章構造が、‘먹-’を叙述語とした文章と異なっており、これらの間の関係を文法論において取り扱うことができるからである。このように見るとすれば、動詞に使役接尾辞や受動接尾辞を付ける過程が形態論の内容であるとすることができるであろう。しかし、万一この

ような造語過程が共時的な過程ではなく、通時的な過程であるという見解を取るならば、話は変わる。

- 6) 韓国語の形態部門が完全に空いているとしなかったのは、本当に形態論の対象であるとしなければならない現象が、韓国語にもありうるからである。よく‘語根分離’と呼んできた語基分離現象(울긁불긁하다→울긁불긁도 하다(色とりどりだ→色とりどりでもある))は、単語内部において起こる現象であるが、文章の形成と関連して起こる。語基分離は形態論の対象であると見ることができる。もちろん、語基分離は統辞論の対象でもある。
- 7) この論文の序論において“言語構造の簡明な記述を目標とする記述言語学の方法”をもって研究すると明らかにして、これについての脚注において著書と論文 8 編を提示しているが、恐らく多く参考にした順序に配列したようである。主に参考にしたものと見られる最初の3つは、以下の本である。(広く知られた本であるので、便宜上、著者、発行年度、題目だけここに示す。)

E. A. Nida (1949) *Morphology: The Descriptive Analysis of Words*.

H. A. Gleason, Jr. (1955) *An Introduction to Descriptive Linguistics*.

Z. S. Harris (1951) *Methods in Structural Linguistics*.

その下の“一般言語学概説書”の関係部分も参考にしたとして、以下の2冊の本を提示した。

L. Bloomfield (1933) *Language*.

C. F. Hockett (1958) *A Course in Modern Linguistics*.

これらはすべてアメリカ構想主義を代表する著書である。

(浜之上幸訳)

#### 【参考文献】

고영근(1993), 『우리말의 총체서술과 문법체계』, 일지사.

고영근·구본관(2008), 『우리말 문법론』, 집문당.

김민수(1964), 『신국어학』, 일조각.

남기심·고영근(1985) 『표준 국어문법론』, 탑출판사.

박진호(1999), 「형태론의 제자리 찾기: 인접 학문과의 관계를 중심으로」, 『형태론』 1: 2.

배주채(1991), 「유추변화는 문법변화인가」, 『주시경학보』 7, 탑출판사.

\_\_\_\_\_(1996), 『국어음운론 개설』, 신구문화사. [개정판, 2011]

- \_\_\_\_\_ (2003), 『한국어의 발음』, 삼경문화사. [개정판, 2013]
- \_\_\_\_\_ (2017), 「교체의 개념과 조건」, 『국어학』 81, 국어학회.
- 안병희(1959), 「십오세기 국어의 활용어간에 대한 형태론적 연구」, 『국어연구』 7, 서울대 국어  
연구회. [1978, 탑출판사]
- 이병근(Lee Pyonggeun)(1970), ‘Phonological & Morphophonological Studies in a Kyonggi Subdialect’,  
『국어연구』 20, 서울대 국어연구회.
- \_\_\_\_\_ (1975), 「음운규칙과 비음운론적 제약」, 『국어학』 3, 국어학회.
- 이익섭(1972), 「강릉방언의 형태음소론적 고찰」, 『진단학보』 33, 진단학회.
- \_\_\_\_\_ (2005), 『한국어 문법』, 서울대학교출판부.
- \_\_\_\_\_ · 임홍빈(1983), 『국어문법론』, 학연사.
- \_\_\_\_\_ · 채 완(1999), 『국어문법론 강의』, 학연사.
- 최명옥(1982), 『월성지역어의 음운론』, 영남대학교출판부.
- 최현배(1937), 『우리말본』, 정음사.
- 최형용(2016), 『한국어 형태론』, 역락.
- 허 응(1963), 『언어학개론』, 정음사.
- Cobuild English Grammar*, 1990, Glasgow: Harper Collins Publishers.